

無許可転載禁

長期分散投資の「長期」とは何年か？

●長期投資は分散投資とセットで効果

運用の基本は「長期分散投資」とよくいわれる。

長期投資の逆は短期投資になるが、短期で利益を得ようとする場合、株式のような値動きが大きな資産に投資する必要がある。値動きが小さな資産に投資しても、短期で利益を得るのは難しいからである。このとき、相場変動を上手に捉え続けられれば、短期売買を繰り返した方が資産を大きく増やせる。しかし、相場を当て続けるのは極めて難しいのが実情である。さらに、短期投資では売買のタイミングが大事なため、相場動向を追いかけしていく必要がある。このため、運用に時間がかかり取られる。つまり、短期投資は手間がかかる割に、長期にわたって利益をあげ続けることが難しい投資手法だといえる。

一方、世界主要国の過去の株式相場の動きを振り返ると、一時的に大きく値下がりしたとしても、長期的には上昇トレンドを描いて来ている。これは経済全体の成長を、株式相場が長期的には反映するからである。したがって、経済成長という前提が崩れない限り、長期的に見れば株式相場は値上がりする確率が高い。

外貨建て資産への投資にしても、短期的には為替変動の影響を強く受けるが、長期で保有し続けると、外貨ベースの資産額が増え、円高に対する抵抗力が高まる。

つまり、儲かるか損するか分からない短期投資より、長期投資のほうが実際に利益をあげられる可能性が高い投資手法だといえる。

ただし、1つの銘柄、1つの資産だけに長期投資して報われる保証はない。1990年以降の日本株式のように、長期にわたって低迷傾向を余儀なくされることもあり得るからである。ここで大事になるのが分散投資である。長期投資は分散投資とセットで行ってこそ効果を発揮するというこ

とを理解しておく必要がある。

●「長期」のメドは10年

下図は、代表的な4資産（日本株式、日本債券、先進国株式、先進国債券）に25%ずつ均等投資した場合の投資収益率の推移である。各資産の収益率は代表的な市場指数に基づいて計算している。

図表1は、横軸の年度の5年前の年度末に4資産に均等投資し、横軸の年度末まで5年間運用を続けた場合の投資収益率、図表2は、横軸の年度の10年前の年度末に4資産に均等投資し、横軸の年度末まで10年間運用を続けた場合の投資収益率を示している。それぞれ、最初に均等投資した後は一切売買を行わなかった場合の、年1回複利ベースの収益率である。

図表1を見ると、いつ投資を始め

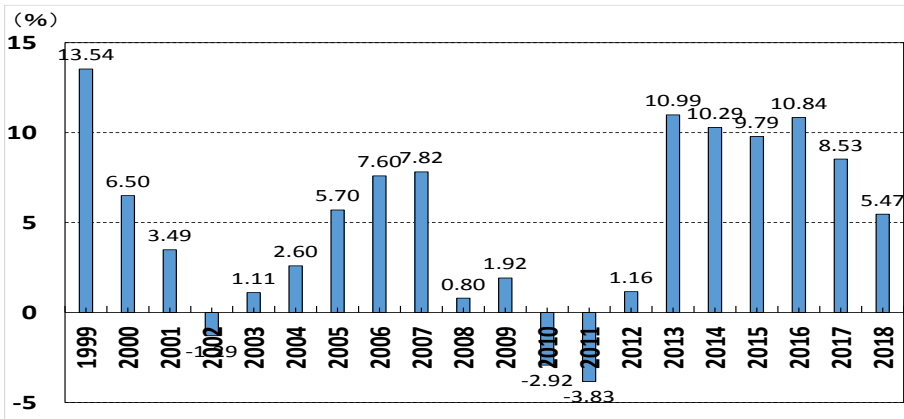
て、いつ投資を終了させたかによって、収益率はかなり異なっている。年率10%を超える収益率になったケースもあれば、マイナスで終わったケースもある。つまり、5年間程度の運用期間を想定する場合は、売買のタイミングの見極めも大事だということになるが、実際にはこの判断が難しい。

一方、図表2を見ると、全てプラスの収益率になっている。マーケット環境が最悪だった2008年度末（リーマンショックが起きた年）で10年間の運用を終わらせた場合、年0.45%という低い収益率になっているが、ここで運用を終わらせず、2014年度まで16年間運用を続けた場合の収益率は年4.03%となっていた。

もちろん、これらはあくまでも過去の実績に過ぎないが、「長期」といった場合、少なくとも10年は意識しておきたいところである。

(クルー 目黒政明)

【図表1】4資産に均等投資、5年間運用した場合の投資収益率（年率）



【図表2】4資産に均等投資、10年間運用した場合の投資収益率（年率）

